

「筑波研究学園都市の民俗」試論

人工的自然の民俗誌

Essay on the Folkways of Tsukuba Science City :
A Folklore Study of Man-made Nature

山下裕作

YAMASHITA Yusaku

はじめに

①筑波研究学園都市の民俗を検討する意味

②筑波研究学園都市の歴史と時代区分

③筑波研究学園都市の新住民

④地元住民から見た筑波研究学園都市

⑤「まつりつくば」と民俗の再生と消滅

⑥研究対象としての筑波研究学園都市「新住民」

⑦筑波研究学園都市の自然

⑧地元住民から見た人工の自然

⑨筑波研究学園都市「新住民」の自然観

⑩筑波研究学園都市における人工的自然の利用

⑪故郷の短命な自然と子供たち

⑫異郷に直面する子供たち

おわりに

【論文要旨】

筑波研究学園都市は昭和55年に概成した計画都市である。43の国立試験・研究・教育機関とその勤務者、及び家族が移転・移住した。これほど大規模な計画都市は、筑波以前には無く、現在まで類を見ない。近年はつくばエクスプレスの開通に伴う民間ベースの都市開発により、洗練された郊外型都市に変貌しつつある。本報告はこの計画都市が最も計画都市らしかった時代（概成期）における自然と生活について検討する。筑波研究学園都市の「自然」は、周辺農村の二次的自然とは異なり、人工の緑地である。生産活動に利用されることは無く、当時植栽されたばかりの「自然」も人とのつきあいの経験が無い。それでも、学園都市の住民たちは、そうした「自然」を活用し、深い愛着を抱いてきた。特に移住者の子弟達にはそうした傾向が見られる。この移住者達は「新住民」と呼ばれていたが、その中身は一様ではない。移住時期によってタイプに分かれ、それぞれ性格づけられていた。しかし、子供達は懸命に新たな同級生や環境に折り合いを付けつつ一様に筑波を故郷として開発しようとしていた。また、元々周辺農村に暮らしてきた住民達は、この新住民達、また学園都市そのものと対立することもあったが、徐々に気むずかしく見える新住民達や、人工的な自然にも慣れ親しむようになる。そして学園都市中心部で開催される「まつりつくば」は、これら旧農村部の住民達によって担われる。その一方で現在「新住民」たちの姿は見えない。彼等は「つくばスタイル」という都市開発のスローガンのもと、「知的環境」を担う要素となりつつある。また、概成後30年が経過し、人工緑地は著しく伸長した。もはやかつての子供達が遊びほうけてきた「故郷の自然」では無くなってきている。開発者の「ふるさと」は消滅しつつある。同様なことは、大規模団地で生活した多くの子供たちにも言えることであろう。ひとり筑波研究学園都市だけの問題ではない。

【キーワード】 筑波研究学園都市、都市計画、開発、自然、故郷

はじめに 「人為的な自然」と「人工的な自然」

「人為的な自然」と「人工的な自然」とでは、おそらく意味が大きく異なる。「人為的な自然」とは、宮本常一が言う「人の手が加わった自然⁽¹⁾」のことであり、それは現在でも生業研究や生態人類学の調査研究対象とされ、盛んに議論されている。本歴博共同研究の「自然と技の生活誌」という課題も、本来はこの「人の手が加わった自然」を構成し、またそうした自然を保全しながら持続的な生活を営むための技術を考究しようとする試みなのであろう。

一方の「人工的な自然」とはいかなる意味を有するか。これは都市整備や集合住宅の建設に伴い一定の規模で整備された人工の植栽、また自然物を模して人工的に作られた公園等の池沼・築山及びその植栽、そしてそれら緑地の都市圏における一連の繋がりを意味するように思える。

現代でも、農山漁村において人為的自然そのものやその濃厚な痕跡は実在する。水田や畑、薪炭肥料の供給地であった近くの山々、植林され林業の営まれた奥の山々、さらに奥に位置する狩猟・採集に使われた山々、海岸部の特徴的な植生等々、様々な人為的自然を我々は確認することが出来るし、その中で生活する人々の記憶や経験を聞くことによって意義ある民俗学の成果を挙げることが出来る。しかしながら、おそらく多くの民俗学者が日常の生活の中で接するのは、主として「人工的な自然」なのではないか？そして、その「人工的な自然」とのつきあいは、早い場合には高度経済成長期から、ほぼ50年という長い時間、たゆむことなく続けられてきたのではないか。

恐るべきことに、筆者が「懐かしさ」を感じる自然は、「真正の自然⁽²⁾」ではもちろんなく、残念なことに「人為的な自然」でもない。今でも子供の頃の記憶として脳裏に浮かぶのは「人工的な自然」そのものである。

この「人工的な自然」に土地の生活者はどのように関わっていたのだろうか。人工というからには当然人の手が加わっているのだが、その場合の「人」とは都市計画の担当者であり、集合住宅の設計者であり、施工業者である。公的な管理者というものが想定されている。また手の加わり方も、身近にある自然を少しずつ改変していったというのではなく、従来の自然を重機で根こそぎなぎ倒し、その後の裸地に一から作り上げられた自然であると考えられる。そのため、生活者が生活上の問題から関与することが想像しにくく、人為的な自然に比べて、考察の対象にはなりにくい。しかし、筆者はそうした自然の中で生活してきた。それも長い間である。同様な境遇にある人々は今日、日本国内に数多くいるだろう。都市や都市近郊の新興住宅地の生活者がそうであると仮定するならば、筆者と同様に「人工的な自然」に懐かしさを感じる人々は、過半に達すると考えても良さそうである。

本稿では、人工的な自然と其中で過ごした生活者たちの実像について考察したい。特に子供たちが、人工的な自然の中でいかに過ごし、人工的な地域での生活を営んでいったのかを筆者自身の経験を元に記述していく。その舞台となるのは、全くの人工的な都市である「筑波研究学園都市」である。

①……………筑波研究学園都市の民俗を検討する意味

筑波研究学園都市は茨城県の南東部に位置する計画都市である。現在、域内には約 300 の研究教育機関が存在し、それらの機関が集中する研究学園地区 2700ha と周辺開発地区を合わせ、面積は 284.07km² となる。この面積は自治体としてのつくば市の面積に相当する。筑波研究学園都市は、学術・研究都市として現在のつくば市全域と定義されるのだ⁽³⁾。人口は約 21 万人（2010 年）、市政施行時 1987 年には約 18 万人、このうち研究者の数は約 1 万 5 千人、内博士号取得者は 5 千 6 百人である。かつてこれら研究者の過半が国家公務員であり、他所からの移住者であるとともに、頻繁な転勤と、退職による域外の故郷への転居が行われた。現在民間の研究機関が数としては多数を占めるが、この研究者達も転勤族が多く、現在でも筑波研究学園都市（つくば市）の人口流動率は大陸型都市に匹敵すると言われ、農村との連続性を有し人口流動の少ない国内の地方都市とは明らかに一線を画す存在である⁽⁴⁾。しかしながら、2004 年の常磐新線（現つくばエクスプレス）の開通以降、マンションや建て売り住宅等、継続的な居住を目途とした住居の建築が進み、東京方面からの移住者と独法化され非公務員化されたことにより転勤が極端に減少した研究機関の勤務者による新たなタイプの居住が進みつつある。かつて多くの研究者が入れ替わり立ち替わり生活した公務員宿舎が取り壊され、マンションや分譲住宅に変貌していく様は、まさに現在の筑波研究学園都市の変化を象徴しているかのようである⁽⁵⁾。

現在においても変化のただ中にある筑波研究学園都市であるが、本稿で取り上げるのは 1970 年代後半から 80 年代前半の期間を中心とする。後述するが、この期間は計画都市である筑波研究学園都市が、過疎化に直面していた農村部に姿を現した概成期、そしてその後の計画都市としての成熟期にあたる。「人工的な自然」がいかにも人工的であった時期でもある。いかに人工的な自然であろうとも、20 年や 30 年もの時間が経過すれば、人工的なコントロールの範疇を超えて伸長しはじめ、生活者たちは選定や一部伐採という人為的自然の管理技術によりコントロールするだろう。それはもはや「人為的自然」へ遷移したと言うことができよう。即ち、この概成期後の約 10 年間は純度の高い「人工的な自然」が存在した時期であり、人工的自然の中での生活誌を論じるにもっとも適切な時期であるといえる。

この他にもこの期間の筑波研究学園都市の民俗を明らかにする意義はある。現在は民間マンションや分譲住宅の建築ラッシュに湧くつくば市であるが、この筑波研究学園都市はあくまで国による計画都市であり、戦後有数の大規模な開発行為であった。そして、通常の開発とは異なる特殊な性格をも有している。既存の都市の拡大に伴う開発行為ではなく、山中に農地を大規模開拓し永住型の農村を造ったわけでもない。ある意味東京の過密対策であったことは確かだが、地理的連続性をもって東京という都市が拡大したのではなく、東京から 50km も離れた場所をわざわざ選択し、多くの建造物、施設、機関を造り、特定の人々を移住させ、短期間で都市機能を構築しながら、農地や山地や湿地帯であった場所に、決して小さくはない都市を造りあげたのである。その過程には様々な事件があった。地元住民の反対運動もあったが、結果として生活者の生活は大きく変化せざるを得なかった。開発側と開発にさらされる地元生活者という典型的な構図に見える。しかし、この筑

波研究学園都市開発において特徴的であるのは、開発側にも、濃厚な人生が、その場所において、存在する、ということである。

民俗学で時折議論される「開発と民俗」の文脈においては、開発にさらされ苦勞する地元生活者の姿が多く描き出される。逆に開発に携わる側の人間は悪人扱いである。少なくともその人生を聞き取り記述しようとする民俗学者はいない。それは極めて重要な部分の見落としに繋がる。開発側の人々のごく短期的にしか、その場所に関わらないということもあろうが、開発側の人々にも人生があり生活があることを忘れてはならない。彼等もまた生活者なのである。この筑波研究学園都市という計画都市には多くの人々が移住し、幾年も幾年もその地で人生を重ねてきた。この都市が最も人工的であった時期の民俗を検討することは、開発側の人々の人生を明らかにすることにも繋がる。その人生を明らかにすることによって、これまで論じられてこなかった近代的な開発を担う人々の生活や、その卑近な望み、そして切実な祈りを後世に書き残すことにもなる。それは筆者の目的の主たるものである。

さらに、近年「団地の民俗」についての研究が高い成果をあげている⁽⁶⁾。それらの研究は高度経済成長期の高揚感、発展に向かう日本の明るい未来を予感させる「あこがれ」の団地生活という書きぶりが多い。狭小な団地敷地に生活用具がいかに適応してきたかという検討もユニークで興味深い。筑波研究学園都市はまた団地の都市である。主に集合住宅である公務員宿舎が1991年当時、凡そ7800戸あった⁽⁷⁾。この都市には概ね農村の農家住宅と公務員宿舎という団地しかなかった。そして農家の人々は団地に住む術はなく、移住してきた公務員は団地以外に生活の場所を選ぶことはほとんどない。そして、この都市の団地に存在したのは、「あこがれ」ではなく、短命な暮らし文化であり、濃厚な住民同士の協働であり、外部である農村との交流である。他地域の団地に比べ特異なものかも知れないが、団地の民俗にかんする研究に、一つの特徴的な事例を提供することは出来るであろう。

今ひとつ付け加えたい。それは「ふるさと」という観念についてである。大規模な開発行爲により作られた都市、その人工的な自然の中で遊び、人工的な自然に囲まれた団地の中で、核家族で生活し、成人後、多くがこの都市を離れる。父母も退職と共に他所で生活するようになる。そんな子供たちの「ふるさと」は何処にあるのだろうか。

村づくりや地域振興活動、政策主導による農業・農村の保全活動が擬似的「ふるさと」を構築する行為であり、誤っているという論調は、特にこの民俗学において多い⁽⁸⁾。しかし、そうした構築された「ふるさと」に高い需要があるということを考えたことがあるか。その原因について思いを巡らせたことがあるか。筑波研究学園都市は一つの顕示的な事例である。しかし、都市近郊の新開地ベッドタウンで生活する多くの人々が持つ「ふるさと」の観念は、筑波研究学園都市に暮らした我々と共通する部分が多くあるようにも感じる。少なくとも古い歴史のある農村に、何世代にもわたって大家族で暮らしてきた人々が持つ「ふるさと」観より近しかろう。筑波研究学園都市概成期の子供たちの「ふるさと」を検討することにより、これまでの民俗学における「ふるさと」に関する議論に対し、出来ることなら根源的な問題提起をしたいと考える。どこまでできるかわからないが、以上が本稿の目的であり、筑波研究学園都市の民俗を記述する意味である。

②……………筑波研究学園都市の歴史と時代区分

(1) 政策史的概観

筑波研究学園都市計画は、先にも触れたが東京の過密対策の一環であった。計画の始まりは半世紀も前の1961年である。この年、閣議において機能上東京に置くことを要しない官庁の集中移転について検討を始めることが決定された。当初は試験研究機関と明記されていたわけではないが、その翌年1962年には内閣総理大臣の諮問機関である科学技術会議より、国立試験研究機関の集中移転の必要性が提起され、研究学園都市建設計画となり、さらに翌1963年にはその建設予定地を筑波地区に決定、閣議了承された。それを受けて、1964年には研究学園都市建設本部が総理府に設置され、日本住宅公団による用地買収が始められた。そして、1972年に科学技術庁所管の無機材質研究所、文部省所管の高エネルギー研究所が筑波に移転し、花室住宅と呼ばれた最初の公務員宿舎に職員の入居が始まった⁽⁹⁾。この無機材研・高エネ研が移転した1972年、この新都市に移転する42の研究機関が閣議決定され、後に4機関が追加された。そして、1980年43機関が移転、業務を開始し筑波研究学園都市は概成した⁽¹⁰⁾。

(2) 時代区分の試み1 つくばファンクラブ

この筑波研究学園都市が計画都市として概成し成熟するまでの期間を整理した2種の時代区分論がある。一つは『つくば研究学園都市大事典』によるものであり、下記のように「つくば研究学園都市」の歴史を整理する。

- ①事業開始以前：～1963（昭和38）年
- ②初期入居以前：～1972（昭和47）年
- ③概成以前：～1980（昭和55）年
- ④科学万博以前：～1984（昭和59）年
- ⑤科学万博以降：1985～（昭和60）年⁽¹¹⁾

①～③にかけては先の政策史的な流れとも符合するものであり、筑波研究学園都市にかかわる者の一般的な考えであろう。④⑤に関しても否定のしようが無い。万博を機に西部百貨店筑波店もでき、今は撤退してしまったダイエーも進出した。便利になったという印象がある。高速バス等公共交通機関も整備され、東京など、外部との交流が盛んになった。しかし、いかにも見たままの、当たり前前の時代区分であり、外部の視点から簡単に目につく変化をメルクマールとしたものにすぎないように見える。

この『つくば研究学園都市大事典』というのは、1990年、つくばファンクラブという有志団体により自費出版されたもので、項目数571、総ページ数124頁の「つくば」に関する用語集である。

その目的は「毎年10,000人以上の住民が、コミュニケーションのないまま無機的に入れ替わること（筑波研究学園都市の高い人口流動のことを言っている）は、住民間のコミュニティ形成を損ね、ひいては継続的な住民主体のまちづくりを阻害する恐れもある。……この『つくば研究学園

都市大事典』は、まちづくりを念頭に置いた用語集としては初めての試みで、これまで各人が各様の定義を与えていたつくばの言葉を共通化する試みでもある⁽¹²⁾というように、「まちづくり」にある。そのために住民各人が多様な意味を持たせて使っていた言葉、特に「筑波研究学園都市特有の新しい言葉」の語義を定義し、共通化して「つくば研究学園都市」の言葉にし、住民間の有機的なコミュニケーションの醸成を図るものである。

例えば「筑波病」という用語は下記のように説明されている。

「つくばびょう【筑波病】(Tsukuba Syndrome) ①筑波研究学園都市を好きになってしまう病気。街づくりに参加した人のほとんどがこの病気にかかる。筑波研究学園都市のためなら命をかけるという症状が現れる。一種の風土病であり、雰囲気により伝染する。

②「筑波研究学園都市にいと疎外されたと思ひ込み、自殺してしまう精神的な病気を言う。」とどこかのマスコミが解説しているが、本当に都市のせいなのか、それとも研究者の性なのか実証した人はいない。⁽¹³⁾」

かつて筑波研究学園都市の「コミュニケーションのないまま無機的に入れ替わ」ったとされる住民(所謂「新住民」)である筆者の記憶によれば、住民間で共通に認識されていた「筑波病」の意味は「筑波に引っ越すと、田舎であるため時間を守らなくなり、のんびりしてしまう。勉強にも身が入らなくなり学力が低下する」というものであった。そのため、最初から息子の脳力を見切っていた筆者の両親は別として、校区の親たちは子供たちに勉強するようしきりに注意していた。そうしなければ「筑波病」に感染し、学力が転居前より低下してしまうと考えられていたのである。確かに筑波研究学園都市において自殺が頻発したことがあり、そのころマスコミにより筑波で自殺することが筑波病と言われた時期もあった。しかし、少なくとも筑波研究学園都市を好きになる病気という定義は聞いたことがない。

このつくばファンクラブは筑波大学出身者と住宅公団職員を中心としていたサークルのようである。いわゆる学業や仕事のために一時的に居住した住民たちであり、筑波研究学園都市からみれば外部者であるといつて良い。したがって「つくば研究学園都市大事典」は外部者が錯覚した「筑波研究学園都市」である。外部者である彼等が一時とは言え主体的に所属意識を感じたのが「筑波研究学園都市」でもなく、「つくば市」でも無い、「つくば研究学園都市」という都市なのである。それゆえに、定住とまでは行かなくても長期的に家族を伴い移転してきた新住民とは感覚が異なる。初期において筑波研究学園都市は筆者ら新住民のために用意された都市である。そしてその新住民のかなりの部分が「研究者」であり、その「研究者」とは筆者たち新住民の子供たちの父や母なのである。筑波病の項目における「研究者の性・・・」という記述には強い不快感を覚える。彼等の「筑波病」は「仲間内で伝染する」そうだが、自殺というものが性とされる研究者の子弟である筆者ら新住民の子供たちにとって、この記述は仲間内の悪ふざけとしか言いようがない。この陳腐な時代区分からは、筑波研究学園都市の住民の生活が少しも感じられない。彼等に言わせれば、その住民たちは「コミュニケーションのない」「無機的」な人々なのだろう。彼等の「仲間内」からはどうやら無視されたようだ。しかし、自身を振り返ってみて、筆者たちが無機的で没コミュニケーションであったとはどうしても思えない。こうした行為そのものを否定はしない。仲間内で楽しめばよいだろう。しかし、学術報告の俎上にあげるために必要であったのかも知れないが、私たちの

生活の姿を勝手なイメージで捏造することは避けていただきたい。我々は筑波研究学園都市で、多くの友人たちとともに、濃厚で有機的なコミュニケーションの中、日々生活してきた。

(3) 時代区分の試み2 — 『長靴と星空』に見る筑波研究学園都市の歴史 —

筑波研究学園都市の過去を探る上で欠かせない文献がある。それは『正・続 長靴と星空』⁽¹⁴⁾という書籍である。この編纂に当たったのは、移転研究者の配偶者たちである。それゆえこの書の記述には理解し共感できる部分が非常に多い。我々の母親たちが編集したようなものである。その中で、正確な意味では時代区分とは言えないだろうが、筑波研究学園都市の歴史にとって重要な意味を持つと思われる区分がある。それは移転の時期による新住民の性格に関する区分である。

移転時期による新住民の区分（丸括弧書きは筆者。鉤括弧は引用。）

①第一期移住者：1972・1973年の移住。無機材研，高エネ研関係のパイオニア。竹園地区に居住。「連帯感が強く，地元への順応度の高かった人たち」。

②第二期移住者：1974・1975年の移住。筑波大学関係の人たち。吾妻に居住。「いささか文化系で，この街のあらゆる方面の組織化に活躍した人たち」

③第三期移住者：1976～1978年の移住。農林省関係（生物系研究機関）の人たち。（並木，松代地区に居住多し）。「比較的若い世代が多く，権利意識の強い人たち」

④第四期移住者：1979年以降の移住。通産省関係（工業技術院）の大量入居の人たち。松代地区（並木地区にも居住多し）「ミニ東京を求めて最後に御輿をあげて来た人たち」⁽¹⁵⁾。

見てわかるとおり，少々論評に意図的な波がある。特に第1期は手放して賞賛し，第2期も「いささか文化系」という意味不明な論評を付されてはいるが，「活躍した人たち」と評価されている。大した業績である。その一方で，第3期は若くて権利意識が強いという。通常，やっかいな人たちにしかこのような論評はすまい。第4期に至っては，筑波研究学園都市に何ら貢献せず，ただただ便利になってから住み着いた，とでも言いたげな書きぶりである。ここには明確な区別意識がある。この区分をしたのは『長靴と星空』執筆編纂活動の中心人物の一人である島美佐子氏であり，彼女は「第二期の人間」である。そしてこの「記録する会」は第一期の移住者の配偶者を中心に呼びかけられ発足したものであるという。第3期・第4期に対しいささか棘があるのも当然かも知れない。筆者は「第3期の人間」である。第4期に友人も多い。その観点から（いささか主観的になるかもしれないが）この島氏の区分を検証してみようと思う。

③……………筑波研究学園都市の新住民

(1) 地元への順応度に関して1 —移住時期による方言の受容の特徴—

まず第1期の住民が「地元への順応度が高かった」とあるが，これはいかがかと思う。ごく主観的に見る限り，第1期，第2期の住民の子弟は，あえて子供の用語を用いれば「スカシテ」いるように見えた。言葉は全くの東京言葉（共通語）であるし，みな頭が良さげに振る舞っていた。地元の子供たちから見ればどこか取っつきにくい印象を持たれたのではないだろうか。しかし，これは

あくまで筆者の主観である。彼等は頭が良いように振る舞っているわけではなく、本当に頭脳明晰で、取っつきにくそうではあったが実はとても親切な友人だった。

しかし、言葉に関しては、ここに興味深い研究報告がある。1979年に中学生を対象に方言の影響を調査した堀口順子の報告である。調査対象は桜村立竹園東中学校の2年生、本校は現つくば市立竹園中学校である。筆者が1978年に転校した中学校である。そのころ中学1年生であった。煩雑なことであるが、筆者は翌年進級と同時に隣接地区の新設校に再度転校した。この堀口の調査は、⁽¹⁶⁾筆者の中学校同級生に対する茨城弁への「順応度」を調査したものである。

堀口は調査対象の中学生を3群に分け検討を行った。桜村は現在のつくば市中心部の旧村名である。

A群は桜村で生まれ育った者8名。所謂地元の住民である。

B群は東京で生まれ育ち、桜村に移住して3年以上経つ者8名。所謂第1期・第2期・第3期移住者の子弟である。

C群は東京で生まれ育ち、1979年4月に移住してきた者8名。所謂第4期移住者の子弟である。

堀口は、この三群における東京式アクセントの影響、茨城弁と茨城弁特有の無アクセントの影響を調べたのだが、結果は下記の通りであった。

A群：東京式アクセントの影響大。

B群：東京式アクセントを堅持。無アクセントの影響はほとんど無い。

C群：東京式アクセントではあるが、半数が学校では茨城弁を使おうとしている。

この堀口の報告が正しいのであれば、茨城弁という土地の言葉への順応度が高かったのはむしろ後期移住者であり、前期移住者は頑なに、自身が外部から持ち込んだ言語アクセントを維持し続けたということになる。そして、これは筆者の経験から言っても正しい。筆者ら後期の移住者(第3期・第4期)は茨城弁をコミュニケーションのツールとして積極的に取り入れた。必要な技術だったのである。それがそのまま地元への順応と言えるかどうか疑問は残るが、言葉の面から見れば早期移住者(第1期・第2期)のみが地元住民に順応していたということにはなるまい。順応であるかどうか不明だが、我々も地元住民の子弟と積極的に関わってきたのである。

(2) 地元への順応度に関して2 —新設校をめぐる混乱—

さらに地元への順応という問題に関しては印象的な事件が発生している。それは筆者が竹園東中の後転校した新設校「並木中学校」の開校に関してである。

当時、筑波研究学園都市(桜地区に限る)には二つの中学校があった。一つは先程来取り上げている竹園東中学校、主に学園都市新住民の子弟が通う学校である。もう一つは桜村立桜中学校、主に地元住民の子弟が通う学校である。地元住民の子弟が竹園東中に通学することもあったが、それは少数であった。逆に学園の生徒が桜中に通うこともあったが、それはなおさら少数であった。両地区の生徒は地理的にも隔絶されていたのである。

しかし、1977年に校舎が完成し、1978年開校予定であった桜村立並木中学校は、学園・地元の生徒が半々になる計画であった。特段の意図があったわけではなく、単に村立の中学校として設定された校区がそうであったというだけなのであろう。

だが、当時桜村の教育委員をされていた「語る会」の島美佐子氏によれば、1978年は就学予定の生徒数が63名と過少であり、次年度に開校が延期。1979年度の就学予定者は196名いたが、この内、59名から「学区外就学願い」が提出されたという。特に二年次編入者では半数を占め、竹園東中学の二年次の過半が新設校への転校を拒否していた。その理由は、①通い慣れた先生や友人と離れたくない、②新設校の学力低下が心配、③子供にこれ以上転校させたくない、④部活動が続けられなくなる、⑤帰国子女指定校としての恩恵を受けたい、⑥竹園眼科への通院の便宜、⑦3km（並木地区から竹園東中までおおよそ3kmの道のりだった）くらい自転車通学の方が体力がつく、というものであった。その後、開校直前の1979年3月24日、新設校並木中学校の体育館で教育委員会と生徒・父兄200名が参加する説明会が開かれ、深更にいたるまでの激しい議論の結果、なんとか開校にこぎ着けた⁽¹⁷⁾ということである。

筆者はこの新設校並木中をめぐる混乱の当事者であった。まさに二年次編入を予定していたが、竹園東中二年次の編入予定者の過半というより、ほぼ全員が反対していたと記憶する。また反対と言っても一様ではなく、賛成を含めて幾つかタイプがあった。①絶対反対派、②反対ではあるが受け入れ派、③容認派、④無関係派、である。①②の反対派は第1期・第2期、そして第3期前期の移住者であった。③容認派は1978年10月に筑波へ転居し竹園東中へ転校してきた第3期移住者。④無関係派は、島氏に「ミニ東京を求めて最後に御輿をあげてやってきた」と評される第4期移住者で、1979年3月4月の移住が多い。筑波転居後、直接新設校並木中に転校してきた生徒とその父兄である。

この並木中開校の騒動を見る限り、島氏の区分における第1期移住者が地元との順応性が高かったようには思えないのである。また第2期移住者が組織化に長けた人々として貢献してきたと殊更に賞賛されることにも疑問が残る。転校拒否の理由に「②新設校の学力低下が心配」とある。まともな理由のように見えるがそうではない。なぜ学力が低下するのか。転校による混乱ということもあっただろうが、学園と地元がほぼ同数という生徒構成に大きな理由があった。地元住民の子弟と同じでは、学力が低下するというのである。並木中開校当初、学園と地元の父兄の間にかかなり強い軋轢があった。その際、地元父兄たちの苛立ちは「お前たちは俺たちをバカにしているのではないか！」という言葉でよく表現されていた。少なくとも第3期以前の移住者は、意識の面においても、地元との順応という面では、極めて限定的であったのである。

あえて付け加えれば、筑波地区が元々学力の低い地域だったというわけではない。移住者の多くが東京等、首都圏出身であるが、それら元の居住地が殊更に学力が高かったということでもない。地域の問題ではないのである。当時（1970年代後半）の中学2年次の父兄は概ね昭和一桁か十年代生まれの世代である。団塊の世代より10年以上年長にあたる。ただでさえ大学進学者の少ない年代である。それがこの筑波研究学園都市には、旧帝大等一流と目される大学・大学院を卒業し、学位を有する研究者が多く居住していた。そしてその子弟は竹園東中学校に集中的に集められていたのである。またその居住も集中も、個人の意志とは異なる国策によるものである。内部に多少のコンフリクトはあったろうが、そのコミュニティーの結束は情実ともに非常に強固であった。外部をバカにすると言うことではなく、内部における結束の強さからくる外部への反発と言った方が正しいだろう。そうした親同士の反発に同調するように、開学後しばらくは子供同士も反目し合った。

しかし数ヶ月も経つとわかまきも解消し、一緒に学業に励み、部活動を楽しんだものである。だが放課後や休みの日、普通に群れて遊ぶのは学園の子供は学園の子供同士、地元の子供は地元の子供同士であった⁽¹⁸⁾。

(3) 「地元への順応」の虚実

島美佐子氏は移住時期による時代区分を行い、特に第1期移住者が「最も地元へ順応的である」とした。しかし筆者の記憶によれば、むしろ3期4期の後期移住者の方が順応的であったという感覚があったため、方言への順応度に関する学術研究報告と、新設校並木中の開学における混乱という事件の分析から、少なくとも第三期の移住者に至るまでは地元住民との「順応」は非常に限定的であることを指摘した。

では島氏の見方は間違っているのでしょうか。

島氏ら初期移住者が中心となって執筆した、語る会『長靴と星空』には様々なエピソードが記述してある。確かに後期移住者は体験し得なかった苦勞の連続である。ただ苦勞のみではない、ゴミ問題等の生活問題を巡って地元桜村の行政担当者と激しくやり合い、段々に理解を積み重ね、協働して、暮らしやすい地域を作り上げていったこと。生鮮食品が購入出来ず、地元農家に直売を依頼したところ快く引き受けて下さり、それが社会的な直売運動として定着していったこと。造成したのみで工事が中断している荒れ地を耕し、地元農家の指導を受けながら農作物を作り、移住者のみで農業協同組合まで作ったこと。ブドウ農園での体験農業。長屋門の一角で開業する岡田医院。吉田ストア、稲葉商店。剥き出しの赤土まみれの道、長靴を履いて月や星明かりのみをたよっての道行き⁽¹⁹⁾。そんな不便な時代を、第1期移住者たち、第2期移住者たちは、地元の人々の助けを借りながら生活を組み立てていった。確かにそうした意味で彼等は「順応」していたと言えるだろう。島氏の記述は間違っていない。しかしながら、これらは言ってみれば開拓のエピソードなのである。下表は桜村地区の人口の推移を表にまとめたものである。つくば市のホームページのデータを加工した⁽²⁰⁾。

表1 筑波研究学園都市(桜地区)の人口・世帯の増減

	人口	増減	世帯数	増減	備考
1970(昭和45)年	8,942		1,984		
1971(昭和46)年	8,993	51	2,002	18	
1972(昭和47)年	9,512	519	2,208	206	第一期(47~48年)
1973(昭和48)年	9,968	456	2,425	217	10月:筑波大学開学(一学・医学・体育)
1974(昭和49)年	11,882	1,914	3,578	1,153	第二期(49~50年)
1975(昭和50)年	14,814	2,932	3,298	-280	4月:筑波大(二学・芸術・大学院)
1976(昭和51)年	17,367	2,553	3,793	495	第三期(51~53年)
1977(昭和52)年	20,924	3,557	4,815	1,022	4月:筑波大(三学)
1978(昭和53)年	24,498	3,574	5,954	1,139	
1979(昭和54)年	29,938	5,440	8,019	2,065	第四期(54~55年)
1980(昭和55)年	34,507	4,569	11,900	3,881	
1981(昭和56)年	35,958	1,451	12,654	754	

※各年10月1日現在

これを見ると、そもそもの人口が9000人弱あるところ、第1期移住者は僅か1000人程度、新開地での生活を一から組み立てなければならぬ少数の開拓者である。周囲の庇護がなければ暮らしていくことは出来ないうらう。第2期には新たに5000人ほどの人口増があるが、この大部分が筑波大学の学生であろう。大学職員の移動は世帯数の増減に近似するものと予測されるが、世帯数の増はわずか900弱、第1期の世帯数増が約400で、人口増の1/2であることを参考に推測すると、学生以外の第2期移住による人口増はおよそ1800人程度、余り当てにならない数字ではあるが第1期第2期あわせても筑波研究学園都市の新住民人口は多く見積もっても3000人を下回る程度だった。表向きは国策に基づき優遇され、実際には生活上の具体的な部分で不便にあえいでいた少数の移住者には、やはり地元住民の好意と協力が欠かせなかつたらう。それが無ければ暮らしそのものが、とても困難なものになったはずである。初期移住者は順応せざるを得なかつた。

こうした状況は1977年頃、第3期移住時期より一変する。この年の世帯数の増分は、1971年当時の世帯数を大きく超える。移住者と地元住民の人口比が拮抗、そして逆転していく。筑波研究学園都市の住民は、この年以降、庇護されるべき少数者ではなくなつた。当然、地元住民とも対等に接しようとした。その結果が後期移住者子弟による方言の受容であつたと考えられる。地元の必ずしも好意を寄せてこない同級生らと対峙するとき、共通語ではなんとも情けない。茨城弁は無アクセント、無敬語といわれるが、勢いのある鋭い言葉である。先方にそんな気がなくても怒られている、あるいは喧嘩を売られていると感じてしまう。そんな時、上品な共通語で反駁しようとする中学生はいない。相手の言葉がきつくて鋭いなら、それを凌駕する言葉を使おうと努力する。見本が先方の操る茨城弁しかないのだから当然それを学ぶ。平時においても同様である。何かの拍子に舐められてはいけぬ。甘つたるい共通語を口走って隙を作るような無能な人間は軽蔑される。我ら第3期以降の移住者の子弟は、少数の賢いエリート集団ではなかつた。力ある異質な集団として地元の中学生には認められ、我々も地元の中学生たちを侮れない異質な集団として意識していた。親たちだって同様だらう。その最初の直接的な接触が新設校並木中の開校だったのである。

第3期以降、筑波研究学園都市は外部から画される強固なコミュニティーを持った一つの特徴ある地域として成立する。そしてその特異な地域の住民として、その子弟として、地元の人々と接触し、反目し、反発し、子供らは折々喧嘩もしながら、段々に理解していったのである。並木中の生徒となつてからも、地元中学校である桜中の生徒とは色々なことがあつた。新治郡全域の中学校が、我々を目の敵にしていた⁽²¹⁾。部活動の大会では学園都市の中学校だけには負けるなど大声で言い放たれた。我々も決して負けまいと努力した。確かに穏やかに交流してのように見える同級生もいた。しかし、彼ら、彼女らの中でも内実においては互いに悔しかったり、腹が立ったり、意外だったり、ほのぼのと嬉しかったりしただらう。そうしたやりとりを幾度も幾度も繰り返しながら、我々は理解を重ねていった。異質という感覚は双方ぬぐえなかつただらうが、高校に進学するころには、異質かも知れないが深く理解し合える友人として相互に意識していたと思う。

このようにして我々後期移住者は地元と順応していった。初期移住者とはその「順応」の方法・性質・意味が異なるのである。第3期、第4期の移住者は、筑波研究学園都市が、周囲の町や村と対等に伍する特色ある地域になつてからの最初の住民であり、その歴史に参与し、その民俗を形作つた生活者である。そして、その歴史と民俗こそが、計画都市、筑波研究学園都市が、最も筑波研究

学園都市らしかったころの歴史と民俗なのである。

④……………地元住民から見た筑波研究学園都市

これまで移住者サイドからのみの検討を行ってきたが、もう一方の当事者である地元の住民の立場から筑波研究学園都市成立までの歴史を見ることも必要である。

実はこの地元住民の目から見た筑波研究学園都市についても、『長靴と星空』に多くの逸話が記述されている。

当時桜村村長を務めていた藤沢勘兵衛氏によれば、すでに1961年中頃から、人口過密な東京から「大学をはじめたくさんの研究機関が、この筑波山麓に集団移転するそうだとか、いや那須高原だとか、富士山だとかの話題がマスコミをにぎわした⁽²²⁾」のだという。直接に学園都市建設についてファーストコンタクトがあったのは1962年末か63年初めで、当時の茨城県知事岩上二郎から呼び出しがあり、筑波山麓に学園都市を作りたいとの政府の要請があったことを伝えられる。

当時茨城県は東部鹿島町を中心とした工業地域の開発、北部東海村における原子力での電源開発、西部の工業団地開発をすすめており、これをゴールドトライアングル構想と称していた。その黄金の三角形の内部を農業地帯として振興させる予定であったが、特段の目玉になる事業があったわけではなく、筑波山麓への学園都市建設に関する政府の要請は、茨城県にとっても期待の大きいものであった⁽²³⁾。

その後、1963年中頃には、河野一郎建設大臣が筑波を訪問し、自衛隊のヘリコプターによる、空からの視察が行われた。この時同行した藤沢村村長は「地元においても初めて見る空からの眺め。ここに都市が造られたら、どんなものができるであろうなんて空想を胸に」したという。さらに、大臣が「実に素晴らしい地域だね」と「馬鹿にお気に入りの言葉」で述べた感想を聞き、「村民も一つの不安を持ちながらも、素晴らしいものができるだろう」という気持ちも抱いたという。

その期待は大規模な署名運動に繋がっていた。関係6町村の土地所有者である農家が誘致賛成の署名を集めて東京に提出した。1万2千人の地権者の署名簿である⁽²⁴⁾。

このように地元住民の間でも学園都市誘致の期待が高まっているなか、早くもその年中頃に、学園都市建設地として筑波山麓が正式に閣議決定された。折しも、同じく候補地であった那須からの視察団が筑波来訪中のことで、「いや、どうも⁽²⁵⁾」とあって別れたとのエピソードが記してある。

このように歓迎ムード一色であったのだが、移転予定の官公庁職員の不用意（おそらくは意図的な）発言によって、状況は一変する。この当時、研究機関でも筑波移転に反対する動きがあり、農林省の職員組合である全農林労働組合も反対を表明していた。その全農林の何者かが、農林省の生物系研究機関の一部が移転する予定であった茎崎町を訪れ、接触した農民に次のように話しかけたという。

「空気はきれいだし、景色も良いし。こんな所に移ってくる自分らは幸せだが、貴方たちは大変ですね。八郎湯へ入植か、アルゼンチンへ移住するかですって？⁽²⁶⁾」

この時（1963年後期）、国（首都圏整備委員会事務局）により作成されていた筑波研究学園都市のマスタープラン（構想図）は、区域面積4000ha、建設に伴う地元住民の移転家屋は1800戸にも

およぶものだった。特に農林省の研究機関群が集中的に移転を予定していた荃崎村・谷田部町では市街地が全面的に計画買収用地に入れられるなど、移転家屋の数が際立って大きかったのである。このマスタープランの情報が、筑波移転に反対する官公庁労組を経て、地元住民にもらされ、それを契機にして2年にも及ぶ反対運動が展開された。⁽²⁷⁾その範囲は荃崎・谷田部地区を中心として逐次他町村にも波及し、最終的に関係6町村の全域に及んだという。

1964年、この反対運動を受けて、国と県と関係町村は協議を重ね、山林を中心とした新たなマスタープランを作成することとなった。計画用地の区域面積は4000haから2700haへと縮小され、移転戸数もぎりぎりまで押さえ込んだ構想である。このマスタープランは1965年に完成し翌年決定された。新プランの移転戸数は当初プランの1800戸から約30戸へと大きく減少し、これ以降、⁽²⁸⁾地元の反対運動は収束し学園都市計画は実行段階に移行することとなる。

マスタープラン変更によって、にわかに反対住民の理解が得られたわけではないが、行政・公団関係者の尽力により、段々に理解を得られるようになり、土地買収も概ね順調に進んでいった。しかし、県や地元自治体が最も効果を期待していた「国立一期校の茨城県設置」に関しては、地元筑波ではなく、首都圏において、移転予定の東京教育大学ではもちろん、国策による大学移転が「教育の国家統制」であるとして、革新勢力全体が猛烈な反対運動を展開していた。ちょうど大学紛争の時代である。特に「筑波大学設置法案」を協議していた国会議事堂は反対勢力のデモ隊が包囲していた。反対のプラカードが林立する中、茨城県と学園都市関係6ヶ町村は600名もの陳情団を乗せた12台のバスで乗り付け、「賛成」のプラカードを持って国会周辺をデモ行進したという。⁽²⁹⁾結局、筑波大学設置法案は強行採決され、現在の筑波大学が設置された。

新マスタープランでの学園都市計画は、このように順調に進捗していった。しかし、その一方で、地元住民の中には犠牲を強いられた人々があったことも忘れてはならない。

戦後、花室の山を切り拓き親子三人の生活をつくりあげ「花室の山のおじさん、おばさん」と呼ばれていた小田倉日正さん、まささん、幾久子さん親子は、造成工事が間近に迫ってきても一部残された花室の山で暮らし続けたが、結局、花室第1住宅建設のために花室大池の埋め立て地に移転された。⁽³⁰⁾

脱サラして故郷の桜村にもどり、有機農業に取り組み、何年もかけて情熱的に土作りをし、ようやく思いどおりの野菜が出来るようになってきたと喜んでいた若い農業者柴原善明氏は、その努力の結晶である畑が、筑波大学の敷地として買収された。代替地として割り当てられた土地は粘土質で、それも不適當な造成をされたため農業には適さず途方にくれていたという。⁽³¹⁾

また、土地の売却を拒否し続けていた谷田部町の農民は、用地買収の説得に来た公団職員を仏壇の前に座らせ「幾百歳 守り続けし 春日の山も 時の流れは如何せん お許し下さい ご先祖様」と詠んでからのち、黙って実印を手渡したという。⁽³²⁾

また、桜村上境の市村芳男氏は「父祖の地へ売り地と書いて冬ごもり」と詠じた。⁽³³⁾

それぞれ、『長靴と星空』に記述してあるエピソードの要約である。

⑤……………「まつりつくば」と民俗の再生と消滅

開発と地元住民、確かに2年間にも及ぶ反対運動があるにはあった。そして犠牲を強いられた住民もいた。しかし、筑波研究学園都市建設の経緯を見ると、概ね開発事業は順調に進展していったと言うことが出来る。この経緯を振り返るに、開発行政 VS 地元住民という単純な対立の構図は成り立たない。初期の反対運動にはこうした対立もあったろうが、その後の経緯は、開発行政 VS 開発行政により移住させられる職員及び家族、地元行政 VS 移住者とその家族、早期の移住者と家族 VS 後期の移住者と家族、地元住民 VS 移住者というような構図が、同時並行的に重なり合いながら推移していったというのが大きな流れである。地元の住民は、単純に開発行政の被害者とは言えない。

現在、つくば市で行われる最大のイベントは「まつりつくば」である。この「まつりつくば」は朝日新聞記者を中心とした「セビログミ」という社会人グループにより発案され、1980年に第1回が開催された。その後、桜村役場、豊里町社会福祉協議会等の人々を中心となって年に一回開催され、市制（つくば市）移行後は、市とつくば市青年会議所、そして71の地元芸能団体が組織する「つくば民俗芸能保存協議会」により実施されている。40万人を動員する大イベントである。メインとなるイベントは「つくば万灯」と何か「ねぶた」。会場は、筑波研究学園都市内の、大清水公園から中央公園、ならびにそれらをつなぐ遊歩道（ペDESTリアン）である。いわば筑波研究学園都市の中心市街区域である。

筆者が住民として最後に見聞したのは「まつりつくば2009」である。その参加団体は、つくば神輿連合を構成する筑波葵会、吉沼睦会、吉沼内坂神輿、今鹿島今宿神輿保存会、上郷北神会他のお囃子グループである。筑波・吉沼・内坂・今鹿島・上郷と、全てが地元の大字名を冠し、それぞれの住民により構成された民俗芸能団体である。このイベントの主人公は地元住民であり、中心となる内容は地元民俗芸能の披露に他ならない。彼等は他に類を見ない程の大規模開発事業さえ、40年という歳月を経て自己の生活の中に内部化した。そして筑波研究学園都市の中心部一帯を舞台にして、民俗芸能による大規模な自己表現を誰に遠慮することなく繰り広げている。「開発行為に対する民俗の勝利」と結論づけられそうな現象である。しかし、このイベントに筑波研究学園都市の住民はどのように関わっているのだろうか。残念ながら「まつりつくば」は筑波研究学園都市中心部で開催されているにもかかわらず、そこに生活する学園都市「新住民」にはほとんど関係がない。⁽³⁵⁾

思い起こすことがある。30年ほど前のよく晴れた日、このペDESTリアンで、小さな祭りが行われていた。発泡スチロールで作られたドラえもんの神輿を、小さな子供たちが精一杯声を張り上げ担いでいた。見物人はいない。その小さな子供たちの親だけ、笑顔で応援していた。他に誰もいない祭りである。それは、筑波研究学園都市に移住してきた人々が、何一つ縁の無いこの土地で、何とか新しい縁を作り上げようとしていた姿である。そうした祭りが、全くの外部者と地元住民という外部者が行う大きなイベントの中に飲み込まれ跡形も無い。そして、その大きなイベントは、自らが住むこの土地で開催されているにもかかわらず、「新住民」たちはただ見物人としての役割しか与えられないのである。

⑥……………研究対象としての筑波研究学園都市「新住民」

『正・続 長靴と星空』は筑波研究学園都市の開拓の歴史を記した書である。そのため第3期・第4期の後期移住者には、あまり関心が払われていない。しかし、新住民と呼ばれた移住者が、庇護されるべき少数者の立場から脱し、筑波研究学園都市が一つの個性ある地域として成立したのは、この第3期・第4期移住後の概成期である。

その筑波研究学園都市概成から約30年以上が経過し、つくば市は20万人もの人口を抱える茨城県第3位の都市となった。「つくばエクスプレス」も開通し、筑波研究学園都市の中心にあたる吾妻地区にはターミナルであるつくば駅が設置された。周辺には大型マンションや大規模な商業施設が次々と建築され、その景観は再び一変した。そうした中で毎年9月「まつりつくば」というイベントが開催されている。大型のねぶたや、筑波万灯等の山車、そして数多くの神輿が、公務員宿舎（現在は独立行政法人宿舎）に面した道路を行き来する。しかし、その祭りに主体的に参加する宿舎の「新住民」は極めて少ない。いまや筑波研究学園都市はつくば市と同義であるという。⁽³⁶⁾「つくば市」に「つくばエクスプレス」「つくば駅」「まつりつくば」、地元住民と外部の人々によるひらがなの「つくば」ばかりが蔓延している。筑波研究学園都市はその中に飲み込まれ、消滅したかのようである。

だが、独法化したものの、移転させられた40余りの研究機関の職員たちは今も、筑波研究学園都市であった場所で生活している。その実には「つくばスタイル」の中にも登場している。

「つくばスタイル」とは何か？「茨城県内のTX（つくばエクスプレス）沿線地域ならではのライフスタイル、沿線地域の魅力である「充実した都市機能」「豊かな自然」「科学のまちならではの知的な環境」をともに享受しながら、人々が自分の希望にあわせて、住み、働き、学び、遊ぶ。これが、「つくばスタイル」⁽³⁷⁾です。」

この「つくばスタイル」とは、筑波地区の都市開発事業を担う茨城県より発信され、大和ハウス工業等、当地区にマンション・住宅販売事業を展開する住建メーカーにより大々的に喧伝された、鉄道の開通を機に始まる大都市東京の外延的拡大という陳腐な開発行為のスローガンである。このスローガンにより、住宅やマンションが高値で売買される。この中に筑波研究学園都市「新住民」の現在の姿が見て取れる「科学のまちならではの知的な環境」、そしてその詳細として、「知識人や外国人など、多彩な人々が育んだハイセンスな暮らし」とある。筑波研究学園都市の新住民たちは、地価を出来るだけ高くつり上げる環境要素の一つとして取り扱われるようになった。⁽³⁸⁾筑波研究学園都市の「新住民」はつくば市に生活することにより、「知的な環境」という経済外部効果を提供する。その一方で、自らの生活圏で行われる、賑やかで仰々しいイベントには主体的な参加が出来ない。今や外部から、経済外部効果を生み出す客体的な存在、という立ち位置を強要されているのである。

⑦……………筑波研究学園都市の自然

今や環境要素の一つに過ぎない「新住民」たちは、約30年前の筑波研究学園都市概成期、いかなる自然環境のなかで生活していたのだろうか。（これより本論では筑波研究学園都市という名称を、面積2700haの研究学園地区のみを指す狭義の意味で用いる。つくば市と同義ではない。その略称としてまた学園都市を用いる。）

当時の居住者たちの記述がある。

「筑波の見本であるソ連のアカデムゴロゾフは、寒帯のため緑の回復に時間がかかるので、自然を残すことに非常に力を注いだというが、ここではブルドーザーを入れても半年ぐらいで緑が回復するため、既存の自然への思いやりが少ないように思う。雑木林の小動物達も少なくなった⁽³⁹⁾」

「家から散歩に出ると、あちこちに公園がある。その公園は広くて良く整備されたものが多いのだが、私には未だに不思議でならないことがある。それは筑波の自然をそのままに残した自然公園がどこにもないことなのだ。……この土地がもとは広大な松林であったことはあとで知ったが、つぎつぎと建物が建設される工事現場では、わずかに残った松林が総なめに切り倒され、建物が出来てから、また松を持ってきて植えるというトンチンカンなことがくり返されていた。」⁽⁴⁰⁾

筑波研究学園都市全体では、昔からあった松林を保全した地域もあるにはあったが、基本的にはこれらの記述の通りである。筑波研究学園都市の自然は、元々あった自然を根こそぎ取り去った裸地に、新たに植栽した人工の自然であった。

その人工の自然はまた、当然のことながら計画的なもので、それは、住宅・都市整備公団研究学園都市開発局による「公園緑地・道路・歩行者専用道路などの主として公共施設としての『みどりの系の構築』」といわれるものであった（図1参照）。現在、つくば市の学園地区に住んでみると、幾つかの幹線道路があることに気付く。南北を貫く東大通り、西大通り、そして東西を結ぶ南大通り、北大通りである。その他にも、さすが元計画都市だけあって、良く整備された道路が多い。しかしながら、この人工的自然「みどりの系」にあって、背骨を為すものは、これらの主要幹線道路ではない。ペDESTリアンと呼ばれる遊歩道である。このペDESTリアンを核とする「筑波研究学園都市のみどりの系の構築」は1985年度の日本造園

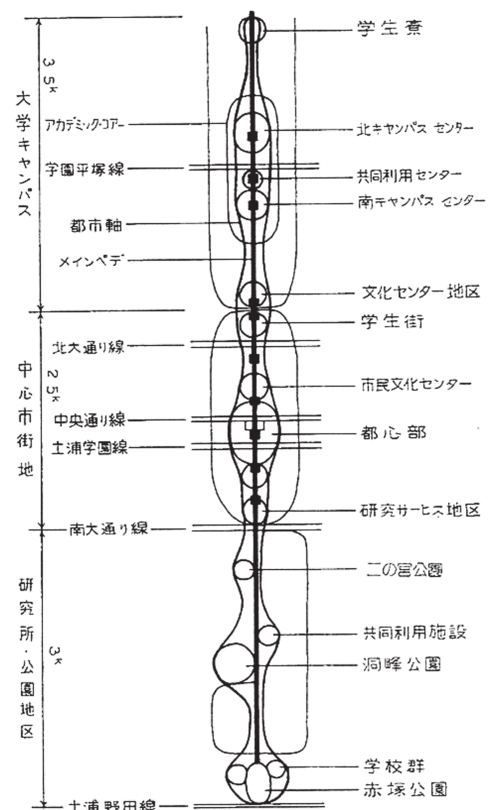


図1 筑波研究学園都市の「みどりの系」
※[沼田ら1985]より引用

学会賞を授与された。その業績要旨には下記のようにある。

「新都市（筑波研究学園都市）を有機的な1つの都市として形成させるために、その基本的骨格として、都市の中央部を南北に縦貫する幹線の歩行者専用道路（巾員10～20m）とこれに接続する広場、公園などの諸施設および近接して設けられる都市の中心的施設を含むある幅をもった棒状のゾーンを設定し、都市軸としている。

自動車を完全に排除した歩行者専用の連続空間を都市の軸として設定したことは、従来の都市には見られない試みであり、研究学園都市というユニークな都市の環境形成の計画理念がここに表現されている。つまり、都市軸は都市における人間の復権をスローガンとした研究学園都市の環境形成のシンボルである。また、人口規模に比べて広大な都市域において、人々に、特に歩行者に都市の一体性を認識させ、わかり易く、親しみ易い街を計画するための空間構成の主軸として重要な意味をもっている。⁽⁴¹⁾」

このペDESTリアンは、北は筑波大学学生宿舎から始まり、大学内を縦貫し、家政大学、筑波エキスポセンター、そして、つくばセンタービル・つくば駅・ショッピングセンターキュートやクレオ、が立ち並ぶつくば市中心街を通り、二の宮公園、洞峯公園、JAXA（宇宙航空研究開発機構）・産業技術総合研究所（旧工業技術院）・気象研究所（旧高層气象台）に囲まれた木立を経て赤塚公園に至る石畳の遊歩道である。総延長はおよそ8km。つくば市の居住者でも、ペDESTリアンを全て歩き通した人は多くはないだろう。

筑波研究学園都市はその概成期から現在に至るまで自動車による移動を中心にした街である。この「自動車を完全に排除した」ペDESTリアンが都市の軸であることを知る筑波研究学園都市住民、そしてつくば市民は極めて少ないように思われる。なかには理想論とあざ笑う者もいるだろうし、人工の自然をもって「人間の復興」とは片腹痛いと思う方も多かるう。

しかし、筆者はこの開発者の志に心から感謝する。私たち、概成期の中学生はこのペDESTリアンを自転車何度でも往復した。友人たちと石畳に這いつくばって化石を見つけようとしたり、安全のためとスズメバチの巣を落としたり、当時はNASDA（宇宙開発事業団）と呼ばれていたJAXAの敷地に侵入して、ロケットが見えないものかとあれこれ探り警備員に注意されたりもした。とりわけ、現在でも鮮明に思い出すのは、二の宮公園近くの車道を跨ぐ橋から見た夕日である。秋の一日、夕日がくっきりと富士山の姿を現しながら、富士山の向こうに真っ赤になって沈んでいく。家に帰ろうとする道すがら、偶然に見たその景観に言葉も出なかった。

確かにその当時、ペDESTリアンに筆者や筆者の仲間たち以外に人の姿を見ることは極めて稀であった。逆に言えばペDESTリアンで過ごしていれば、友達と出会えることが多かった。それは高校に進学して、大学に進学しても同様であった。この軸たる遊歩道を歩けばかなりの確率で懐かしい友達に会うことが出来た。

筑波研究学園都市は我々概成期の中学生にとって、美しい都市であった。我々を大切にしてくれる都市であった。少なくとも我々概成期移住者の子弟にとって、この「みどりの系」と言われる人工の自然は、開発者・設計者の情熱が志した良き効果を実際にもたらしていた。

⑧……………地元住民から見た人工の自然

では地元住民の眼には、この人工の自然はどう写ったのだろうか。現在のつくば学園地区のイメージは、「つくばスタイル」によって外部の人々に発信されているイメージ同様、きれいで整備された市街地というもののようであるが、概成期において、それはもう少し複雑であったろう。目の前で風景が切り取られ、新しい人工的な景観が張り直されたようなものであるし、人によっては反対運動や、その後の土地買収に当事者として関わっていたのである。今となってはなかなか直接調査も難しいのであるが、当時の俳句からその大まかなところを読み解きたいと思う。学園都市に関係する大穂町・桜村・谷田部町・豊里町、そして近隣の牛久市の住民を同人とする「ふもと」という句集があり、その中の筑波研究学園都市に関連する句が『長靴と星空』に抜粋されている。それらを年代順に並べてみよう。

- | | |
|-------------------|-----------------------------------|
| ①ビルが生む影大いなり夕冬田 | 大穂要 沖山茂利（昭和52年1月） |
| ②茶の花や舗道はここより都市に入る | 大穂大曾根 会沢一穂（昭和52年1月） |
| ③引越しの荷に花冷えの未完寮 | 桜中根 小林はる（昭和52年4月） |
| ④学園路よぎりし風ら垣根バラ | 谷田部西平塚 中島朝（昭和52年7月） |
| ⑤開発に追はれ消えゆくほととぎす | 新治小野 乾やすえ（昭和52年7月） |
| ⑥孫つれて未完団地に苺摘む | 桜上境 露久保志づ（昭和52年7月） |
| ⑦子守りして歩く団地の尾花道 | 露久保志づ（昭和52年10月） |
| ⑧展望塔できて夏野が小さくなる | 桜中根 横田清桜子（昭和53年6月） |
| ⑨給水塔遙かに見えて野の桔梗 | 桜上境 市村芳夫（昭和53年10月） |
| ⑩村の子とともに育ちてあげび採り | 市村芳夫（昭和53年11月） |
| ⑪新都市に草取る主婦の日焼け顔 | 谷田部下平塚 若山年男（昭和54年7月） |
| ⑫団地街残りの松に蟬の声 | 桜東岡 小神野藤花（昭和54年9月） |
| ⑬新都市のビルよりなびく鯉のぼり | 若山年男（昭和55年6月） |
| ⑭学園はパリの縮図か緑濃し | 豊里野畑 沢辺進（昭和56年9月） |
| ⑮枯草の中せかせかと家が建つ | 牛久 海老名衣子（昭和58年1月） ⁽⁴²⁾ |

①⑧の句は筑波研究学園都市が出来て後の景観に違和感を感じているように見える。また⑤の句は学園都市建設により自然が失われたことを告発する。②は学園都市とそれまでの自然とを区別している。茶を用いるところ、その境は消しがたいことを象徴しているようにも読めるが、この人はその後学園都市に入って行く。学園都市に入ってその風情を詠んだ句は多い。③④⑥⑦⑪⑫⑬とあり、③⑪⑬は学園都市に越してきた人々の生活にも暖かな視線を送っている。⑥⑦は幼い子供をつれて学園都市を散策しているようだ。安心できる自然がそこには有ったのだろう。⑫は人工の自然の中にも、かつての自然が残っていることを見出す。さらに⑨は都市の構造物の遠景と身近な自然物の取り合わせであり、そこに以前の違和感はもはや無い。地元の住民たちは自分たちの生活圏か

ら見える学園都市の景観・自然に親しみを覚えつつあった。同様に新住民の子供たちも歓迎している。⑩の句を詠めば、彼等が我々を優しく見守っていてくれたという事実に愛惜と感謝の念を覚える。そして、⑭の句を見ると、筑波研究学園都市の緑、即ち「みどりの系」として計画された人工の自然は、欧州の古都と比せられるほどのものと賞賛されるのである。

筑波研究学園都市が概成して後、隣接する牛久市では大規模な住宅団地が建設されることとなる。再び、この茨城県南地域に新たな開発行為がスタートするのであるが、この民間ベースの開発行為に感ぜられた違和感を吐露したのが⑮である。この後随分と時が経ったが、この違和感は果たして解消されたのだろうか？

⑨……………筑波研究学園都市「新住民」の自然観

前々章において、かなり主観的かつ叙情的に筑波研究学園都市の自然を評価した。この筑波研究学園都市の人工的自然、即ち公共施設としての「みどりの系」はかなり実験的な試みとして評価され、実験的であったがゆえに注目度も高かったようである。1982年には筑波研究学園都市居住者の緑地機能評価に関するアンケート調査が実施され、日本建築学会大会で報告された。その結果について見てみよう。

本調査は筑波大学の田島学らによって1981年12月に実施された筑波研究学園都市居住者に対するアンケート調査である。対象は所謂新住民と筑波大生であり、サンプル数は竹園地区住民68名、並木地区住民57名、筑波大生102名の合計227名である。

本アンケート調査では、筑波研究学園都市の緑地分布図を用い、「最も親しみを感ずる緑地」を一カ所分布図上に記入してもらい、その機能について21の項目を6段階に評価させた。そのうえで、その緑地との接し方を聞き取りしたという。アンケート調査とされるが、対面式の質問票調査に近い。

この結果、最も親しみを感ずる緑地として、「公園、街路樹、緑道、草地、空地といった計画的につくりだされた緑地を指摘した人が多く約75%を占め」た。さらにその（調査対象者が指し示した）緑地の機能評価に関しては「安らぎ・すがすがしさ・季節感といった項目では特に評価が高く、散歩・休養の場・街を美しくする・自然と親しむ・木陰をつくるといった項目でも評価が高くなっている。これに対し、洪水を防ぐ・日当たり・気温調節・防風・延焼を防ぐといった項目では評価が低い」という。確かに筑波研究学園都市には洪水が懸念される河川は無い。日当たりは緑地に関係なく良好である。風は強いが、この当時の緑地の樹木は、まだ風を防げるほど生長していない。延焼もコンクリート製の公務員宿舎には半ば無縁である。身近な緑地にそれらの機能を見出せないのも無理からぬことである。

しかし、「緑地（一般）にはいかなる機能があるか？」という問いかけに対し、学園都市の住民は、①環境を保全する機能（環境保全：防塵・防風・騒音緩和・気温調節）、②居住者の利用を受け止める機能（利用効果：遊び・運動・スポーツ・避難場所）、③快適性（すがすがしさ・安らぎ・季節感）、④都市の景観に対する機能（存在効果：地域のシンボル）と応えたという。田島らのグループは他に東京都世田谷区、北海道札幌市でも同様の調査を行った。世田谷区では④存在効果、②利

用効果の順で二種の機能のみ、札幌市では②利用効果、③快適性、①環境保全の順で三種の機能しか住民は挙げられなかった。筑波研究学園都市住民は緑地一般の機能に関し他地域に比べ多様に捉えていたのである。

これらを整理すると、筑波研究学園都市の新住民は、①計画的に作り出された緑地に愛着を持っている。②身近な緑地を、地域環境を創造・保全するものとして評価しているが、その生活上の活用に関しては未だ消極的である。③しかし、他地域に比べ、緑地一般が持つ機能に関して、多様に認識している、という。以上が田島らの調査研究の成果である。⁽⁴³⁾

本調査から、概成期「新住民」にとって「みどりの系」に基づきつくられた緑地は、愛着を感じる緑地であり、快適性を主とする生活環境を提供・保全する緑地であった。そして、当時の時点では出来て間もない緑地であるし、当人たちも転居したてであったろうから、未だ生活上の具体的利用に関して戸惑いはあるものの、緑地一般の持つ機能を多様に想定し得ていることから見て、今後の利用可能性が期待される自然であったと言えよう。

目を転じてみると、この人工的自然で満たされた筑波研究学園都市の周辺には、古くから人間が利用し育ててきた豊かな二次的自然が、それこそ関東平野の果てまで広がっている。しかし、概成期の新住民、特に子供ではない大人が、古い集落地に出入りし、その自然に触れることはごく稀であった。子供の転勤と共に筑波研究学園都市に転居してきた新住民の年老いた親は、ある時、その豊かな二次的自然を次のように歌った。

「大空に続く田の面に木枯らしの風吹き渡り白さぎの舞う」(並木老人クラブ)⁽⁴⁴⁾

この歌に描かれたのは、学園都市に住む誰もが見て、程度の差はあれ寂寞を覚えたであろう情景である。学園都市の周囲に広がる本来は豊かで暖かな二次的自然は、新住民にとって、どこかよそよそしく、時に寒々としていた。

この当時、公務員宿舎にも老人が多かった。まだ核家族化が現在ほど進んでおらず、子の転勤に伴い、ともに概成したばかりの筑波研究学園都市に移住してきたのである。その老いた人々は、この学園都市で故郷の自然を思い起こしていた。

「老いて今子と共に来し常陸野に故郷恋うて語り合う友」

「ふとかいな挙げしたまゆら香りたる伊予柑語る君は南国」

「しば漬けを土産に持ち来し京なまりの君が言葉はやさしかりけり」

自らの故郷を思い、同じ境遇にある友人の故郷を思う。その故郷にある自然こそが、本来の「我らが自然」であったはずである。

「鹿島立ちの防人の祈りしのびつつ交通安全のお札求める」

「高血の吾子の為にと富有柿持つ肩まがる母は八十」(並木老人クラブ短歌集)⁽⁴⁵⁾

時に開発者として責めたてられ、今つくば市では単なる環境要素の一部として空気にも等しい存在である概成期の新住民たち。建築後30年から40年経過し老朽化した公務員宿舎に対して、「つくば新都市にふさわしくない」という意見もネット上にあるらしい。この書き込みをした人は、この四角い箱のような建物の中にも人生があったことを、想像し得ないのだろう。ここには故郷を後にして、故郷を思いながら暮らした老人たちがいた。そして、そうした老人たちに案じられながら、交通安全の御守を渡されたり、健康のために富有柿を食べよう勧められた息子たち娘たちがいた。

そして、その息子・娘たちにはまた、我々のような小さな子供たちがいた。それぞれ違う故郷を持つこれらの家族・人々が、新たに「我らの自然」として共有したもので、それこそこの筑波研究学園都市の人工的な自然、即ち「みどりの系」であった。

⑩……………筑波研究学園都市における人工的自然の利用

これら筑波研究学園都市の人工的自然は、生活者にどのように利用されていたのだろうか。「日常生活上の利用に関しては消極的」と田島らは指摘するが、利用が無いままでは単なる鑑賞の対象でしかない。実際のところ、筑波研究学園都市の緑地とは公園緑地、団地間の緑地、公共施設内の緑地、街路樹、遊歩道などであり、利用はかなり難しい。実や樹皮、枝等を採取するわけにも行かないし、堆肥を入れる農地も持たないので木の葉を集める意味もない。樹木類は国有財産であり関東財務局の所管であったため、伐採して建材に使ったならば罪に問われる。民俗学的な利用を考えるならば、利用のしようがない自然である。しかし、それでは人工の自然は、人工ではあるが、行政等管理者以外の人の手が入らない、生活とは無縁の自然となりかねない。二次的自然、人為的自然に比べむしろ真正の自然に近くなってしまふ。しかし、実際には生活者の中にこれら自然を積極的に利用していた者があった。その者らは関東財務局の存在を知らず、誰の目も気にすることなく公共緑地の木々を蹴飛ばして、食べられる実であれば臆することなく口にしたりした者たちである。もうお分かりのことと思うが、それは子供たちであった。

倉石忠彦氏は長野県の新興団地を調査し、団地の昼と夜とを区別し、昼間は主婦と子どものコミュニティー社会であり民俗社会の性格が父親が帰宅した後の夜とは全く異なることを指摘しているが、この傾向は筑波研究学園都市においても非常に顕著である。⁽⁴⁷⁾ インテリの親というのは大抵家では口うるさく子供たちには煙たい存在であるが、学校が長期休暇中の昼間の筑波研究学園都市は子供たちの天国であった。学園都市の子弟というと、「つくばスタイル」の「知的」環境要素よろしく、大人しくて、出来が良い、聞き分けがよいとの印象が強いらしい。図2は概成期に筑波研究学園都市に存在したコミュニティー活動の一覧であるが、「知的」な子供たちの多くは、母親とともにこうした活動に積極的に参加していた。その一方で、当然のことながら、そうしたコミュニティー活動に興味のない子供らも沢山おり、その子供らは、学校が休みの日中は、多くの場合（例外もあるが）父親は仕事、母親はコミュニティー活動に出かけてしまうため、野放しだった。当然ゲームは無く、テレビも面白い番組など存在せず、野放しになった子供たちは野外を目指した。屋外に広がるのは手つかずの（真新しい）人工の自然である。

様々な原始的な遊びが展開された。団地と団地の間にある緑地でバッタやカマキリを捕らえるのは見戯に等しい。遊歩道脇や公園緑地の松林に分け入り、手当たり次第に蹴飛ばして、ヘリコプターのように落下してくる松の実を集めて食べたが、なかなか空腹は満たされない。中学校の敷地内に植栽された木に、不思議なものがびっしりとついていた。白くて柔らかい外殻に、木から剥がしてみると中が鮮やかな赤色である。特に考えず空き缶に集めるだけ集め、果たして食べられるものか考えていると、折よく地元の同級生が来て、何をしているか尋ねてきたため、菓子と偽って食べさせた。あまりの味にすぐ吐き出したが、後に調べたところこれはシロロウムシというカイガラムシ

の一種で軽い毒性があるらしい、悪いことをしたと反省している。

また中学生男子であったら、大抵の場合爆竹を持っていた。爆竹はただ路上で音を出すためのものではなく、大抵は昆虫や両生類そしては虫類が犠牲になった。蟻の巣、カミキリ虫、カエル、トカゲの類であり、それらは公園や団地の緑地のなかで捕獲された。さらに、折々公園の樹木にスズメバチがおり、樹液をなめていた。スズメバチは（罪はないが）危険であると聞いていたので、駆除を計画する。樹液を舐めている最中に竹竿で思い切り叩く。大抵は狙いが外れスズメバチは飛びながら襲ってくる。それを竹竿でたたき落とし踏みつける。スリルと快感に満ちた社会貢献気取りである。夏休みにはこれを連日行い仲間内で駆除数を競ったりもした。

すこし学習的なこともした。タヌキモという食虫植物が少し距離のある大きな公園（洞峯公園）の池にいる、と理科の先生が教えてくれたので早速捕まえに言った。貴重な植物だから取ってはだめと注意されたのだが、「貴重」は「危険」の間違いだらうという勝手な解釈により、行動に移る。周囲1kmほどもある大きな池を何度も経巡ったが虫を食べるような猛々しい水草が見つからず断念した（後日確認したところ普通の水草だった）。あまり面白くなかったので、隣接する宇宙開発事業団の緑地に侵入し、警備員が巡回していないことを確認して、爆竹を盛大に鳴らしたりもした。慌てて追いかけてくる警備員の姿を確認して、退散するのである。もう時効だろう。

今、この洞峯公園には多くの市民たちがやってくる。ランニングをしたり、犬を散歩させたり、小さな子供がアスレチックで陽気に遊んだりしている。しかし、筆者らが利用していた概成期のころ、この公園に人影はまばらだった。その分、池の中には生き物がうごめいていた。雷魚・モツゴ・鮒・めだか等々、水生昆虫も大勢いた。今では考えられないことだが、この池では釣りが許されて

☆ コミュニティー活動

子供関係：①花室読書クラブ(48) ②並木子供会(50) ③吾妻文庫(50) ④子ども劇場(51) ⑤ボーイスカウト桜団(51) ⑥竹園読書クラブ(53) ⑦かたつむり文庫(電電公社) ⑧同人誌『月桂樹』(54) ⑨並木育泳会(55) ⑩けやき文庫(56)

音楽関係：①コールプリメール(51) ②ガムマジカ アンサンブル(52) ③もくせい会 ④コール桜 ⑤並木ギター・マンドリンアンサンブル(54) ⑥アンサンブル・セーズ

絵画関係：①桜美術クラブ ②絵画愛好会 ③火曜会(52) ④パレット ⑤彩芽会 ⑤彩味会 ⑥環美術グループ ⑦ヴォワール ⑧油絵研究会 ⑨アトリエ吾妻(58) ⑩でんでん虫 ⑪四季の会 ⑫ユトリロ

社会活動：①学園都市を考える会(48?) ②安全食品を考える会(53) ③筑波研究学園都市の生活を記録する会

スポーツ関係：①フォークダンス桜友会(51) ⑤並木クラブ(53：バレー；日本一)

その他：①陶芸(50)等各種公開講座 ②並木クッキングサークル(53) ③並木パンアート・ダフネ(53) ④並木老人クラブ(53)

図2 筑波研究学園都市概成期のコミュニティー活動

※[記録する会1985]より作成
※括弧内の数字は設立年、昭和で表記。

おり、この公園で見かけるのは我々野放しの中学生と釣り人くらいのものであった。

筑波研究学園都市の公園には池が多くある。概成期当時の公園では良く釣りをしていた。乙戸沼公園では筆者自身が40cmを越す鯉を釣り上げた。竹園近隣公園の池は今では土砂が堆積し浅い池になってしまったが、完成当初は水深もあり、魚も比較的豊富だったので、よく大人たちが、小さな子供たちに紛れて真面目に釣りをしていた。一方、並木地区の近隣公園の池は、きれいな水を湛えているだけで、生き物、特に魚類の姿を見ることができなかった。竹園の池には魚がいるのに、並木の池にはいない。それが並木地区に住む我々には癪にさわった。

先の話に戻るが、警備員から逃れ、再び洞峯公園をうろついていた我々に、釣り人の小父さんが、釣り上げた雷魚を下さった。雷魚は大きな肉食性の魚である。大変どん欲な食欲を有している。その類の知識は我々には豊富にあった。ありがたく頂き、即座にそれを竹園近隣公園の池に放流する計画を立てた。早速筑波研究学園都市の軸であるペDESTリアンを自転車で駆け抜け、竹園に向かったのだが、その経路上には魅力的なものが多すぎた。広大な造成地がそれである。何時工事が始まるかもわからない無人の造成地では、我々が何をしても大人たちに見とがめられることがなかった。石を投げたり、爆竹を鳴らしたり、自転車で起伏のある地面をひたすら走り回ったりした。その最大の造成地が、現在のつくば駅周辺である。竹園地区に行くはずが遠回りして、その吾妻地区に位置する造成地に至り、ひたすら自転車をこぎ走り回った。少し水漏れするビニールに入れていた雷魚は残念ながら息絶えてしまったため、仕方なしに埋めてしまおうと造成地に穴を掘ってみたら太い骨が見つかった。興奮した中学生は、その骨を出来たばかりの筑波中央警察に持ち込み、暇そうにしているお巡りさんに知らせたが、調べたところそれは犬の骨だった。何一つ目的を果たすことなく一日は暮れ、うるさい父親が勤務先から帰る前に急いで帰宅したが、その丸一日、人工の自然の中で過ごしていた。夏休み等の長期休暇中は連日過ごしていた。夜でさえも、家を抜け出して公園緑地の中で流星群を鑑賞したり、幽霊が出ると名高い夜の学校を徘徊したりしていた。

これが概成期中学生の日々であるが、それなりに我々が環境を作ったという自負も持っていた。先の生き物がない並木近隣公園の池であるが、隣接する地元側に花室川という田んぼの中を流れる川（実は用排水路だった）がある。そこで魚を捕まえ、せっせと我が自然領域内の池に放流した。ただ川釣りには技術が必要で、なかなか未熟な腕では量を確保できない。網で試みても難しい。ただ年に数回、川の水が減り、魚を手づかみで採れる日があるという。それは一斉防除の日である。周辺の水田にヘリコプターで農薬を散布する日である。川の水（用水）が薬で汚されるため、上流の堰を閉じる。その下流部で川が干上がり魚が取り残されるのである。安全性を考え雨合羽を着込んで、ヘリコプターが飛来する前のほんの短い時間、集中的に魚を採った。バケツが魚で一杯になり、ヘリコプターの音が遠くに聞こえ始めると同時に、自転車を全速力で漕ぎ続け、学園地区に逃げ込み、並木近隣公園の池に放流した。そのせいで、数年もたたず、並木の池は鮎、川ハゼ、モツゴ、タナゴ、川エビ等様々な魚が釣れる豊かな池となった。我々はまさに命がけでこの自然をつくりあげたのである。⁽⁴⁸⁾

しかし、その後、いつかは知らないが、この池にブラックバスとブルーギルが放流された。現在この池の多様な魚種は姿を消し、ギルとバスばかりとなった。ルアーロッドを振るっているマナーの悪い釣り人たちは、概ね自動車でこの池にやってくる。近隣の者ではないのだろう。不思議なこ

とにブルーギルやバスが増えると、水も汚れるようである。かつては美しかった池も、今は何故か汚らしくみえる。

ともあれ、この筑波研究学園都市の子供たちにとって、自然とは①公園緑地、②団地間緑地、③公共施設緑地、④造成地、⑤道路緑地（街路樹・ペDESTリアン）であった。紛れもない人工的自然である。

そして、人工的自然を自然としていたのは、おそらく筑波研究学園都市のみではないだろう。郊外型の大規模団地、ベッタウン・ニュータウンともよばれる大規模住宅団地の子供たちもまた、建設者により作られ管理者によって管理される人工的自然で、そこに棲息する生物たちとともに遊んできたに違いない。とりわけ小さい子供たちは、母親とともに砂場やブランコのある団地横の小さな公園で遊び、団地と団地の間にある草むらでバッタを捕っただろう。こうした団地間の緑地に懐かしさを覚える人々は存外に多いのではないか。

現在、団地民俗への注目が高まっている。博物館でも団地の間取りや生活諸用具の展示がされている⁽⁴⁹⁾。しかし、昼間の団地の子供たちは晴れていれば大抵外にいた。特に母親の目が届く団地間緑地は安心できる自然であった。是非再現展示の要素に加えて欲しい。

⑩……………故郷の短命な自然と子供たち

筑波研究学園都市の人工的自然は現在でもそこにあるだろうか。少なくとも概成期の「新住民」が新たに「我らの自然」として共有した人工的自然はもう存在しない。当時子供であった筆者は、現在の筑波研究学園都市の人工的自然に懐かしさを感じない。同級生たちもほとんどがそうだろう。

我々の自然は、様々な要因で大きく変化している。それが当然景観の変化をもたらし、概成期の筑波研究学園都市の景観と、現在のつくば市学園地区の景観とは、大きく異なるのである。しかしながら、我々の記憶のみではいかにも実証が難しい。ここに30年にもわたり景観の記録を行ってきた重要な成果がある。青木陽二による「筑波研究学園都市景観変化の記録（1980 1991 2006）」⁽⁵⁰⁾である。ここから幾つかの写真を引用し、その景観変化、そして人工的自然の変容について見てみよう。

①吾妻1丁目の造成地：開発による変化



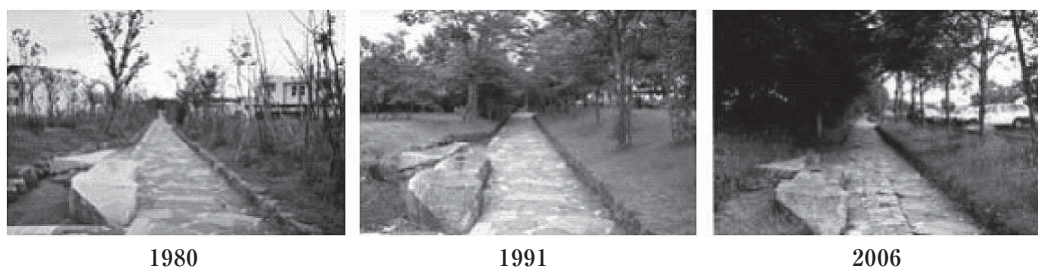
概成期には工事を待つ造成地であった。石を投げたり、自転車で走り回って遊んでいるうちに犬の骨を見つけた場所である。犬の骨騒動のあと程なくして工事が始まり、アスファルト敷きの駐車場になった後、現在は民間の大規模な商業施設が建築されている。

②並木3丁目の公務員宿舎：緑地の生長による変化



かつて友人の家に遊びに行く際、よく通った道である。その友人も友人の家族も、もはやここには住んでいない。緑地帯の生長が著しく、当時の景観との共通点を見出そうにも箱形の無個性の宿舎以外には見当たらないし、その宿舎も植栽の影になった。

③並木4丁目遊歩道：緑地帯の全体的伸長による変化



支線ではあるがペDESTリアンである。筑波研究学園都市の軸となるペDESTリアンもこうした石畳の道である。この遊歩道脇の緑地で、我々は長い時間を過ごした。友人たちと話し込んだり、虫を採ったり、植物を採取したりしたのだが、明るく開けた場所で、爆竹を鳴らそうものなら、宿舎のベランダから何事か？と、友人の母親が顔を出してきたのが見えた。今は緑地が全体に伸長し、樹木が鬱蒼と茂る暗い場所になっている。

④大角豆地区：開発と緑地の伸長による変化



この場所は研究学園地区と地元集落の境界にあたる。子供らにとって少しスリリングな境界線であった。美しい水田だったのだが、畑となり、最近では荒れ地となった。右手に見える背の低い宿舎は、街路樹（桜）の生長により見えなくなってしまったが、2006年時点では取り壊される予定

になっていた。おそらくは、この水田跡の荒地共々、民間のハウジング会社に売却され、小振りで綺麗な家が一面に建てられるのだろう。奥にある背の高い公務員宿舎は現在でもあり、単身赴任者が生活する。この下に並木近隣公園の池がある。背の高い宿舎のうち手前の宿舎には幽霊が出るとの噂がかつてあった。

当然のことながら1980年の景観が概成期の景観である。開発行為による景観変化も多々見られ、特につくばエクスプレスの開通に伴う開発は、学園中心部の景観を大きく変貌させている。①の2006年の変化はこの開発による。また、④についても、この開発行為となんらかの繋がりがあるのだろう。

だが、開発行為以上に筑波研究学園都市の景観を変化させている要因がある。それは木本草本の生長であり、人工的自然の伸長であり肥大である。②と③、そして④の街路樹を見ればわかるだろうが、緑地を構成する木や草が著しく成長している。本来的自然物である草木が、人工的自然の範疇を超えて延伸しているかのように見える。これらの木々の多くが、筑波研究学園都市建設時に植栽された個体である。少なくとも概成期以降、30年以上の年月を齢として、そこに在り続けている。その30年の間、写真に見るとおり、景観は大きく変わった。個体は同じだとしても、我々が小突いていた木々とは太さから高さから別物である。実に我々筑波研究学園都市概成期の子供にとっての自然は、全くの人工的自然であると同時に、わずか10年で大きく生長してしまう短命な自然であった。

⑩……………異郷に直面する子供たち

筑波研究学園都市の「短命な自然」、これはまた多くの団地において同様であろう。

自然には「自然遺産」等々、客観的価値を権威に保証され認識される自然がある一方で、生活者とその生まれ育った故郷の生活の中で、主観的に認識し活用してきた自然もある。後者の場合、故郷の場所や、生活年代の違い、そして生活者それぞれの拘わり方や程度、その時々感情の動き等によって、自然は多様な様相をもつ。民俗学が扱うべき自然は、後者の自然であろうと思う。しかし、この自然は、一般化が不可能な取り扱いにくい自然である。しかし、場所や年代、環境等、ある程度一致する条件があれば共感することは可能になるだろう。ここで「短命な自然」としたのは、概成期筑波研究学園都市の人工的自然にして、植栽後の10年間の自然を指す。私の同年代の元新住民には共感してもらえらるだろう。さらに筑波以外においても、造成直後に「憧れ」を持って団地に入居した家族の子供たちにとっても、この「短命な自然」という概念は共感をえられるのではないだろうか。

松戸市の常盤平団地は「森の中にある団地」と言われるようだが、本来は森の中にあったわけではない。団地散歩はネットで一定の流行になっているようであるが、辰巳団地にしろ多摩平の森団地にしろ、その緑の多さが賞賛されている。しかし、それらは建築当初まだ細くて背の低い幼木だったはずである。いずれも人工的自然がもはや人工のコントロールを超えて生長した結果であり、わずか10年ほどでその団地の景観を大きく変えてしまった。

団地の建設は1950年代後半から1970年代を通じて盛んに行われた。建設されたばかりの真新しい団地には、ほとんどの場合、同じ年頃の若い夫婦たちが生活し、多くの子供たちが産まれた。子供たちは人工的で短命な自然の中で成長し、大人になり他出した。以来、団地の多くが高齢化している。少なくとも居住者の多様化が進み、若い夫婦者は逆に少なくなった。

かつての団地の子供たちは現在50才前半から40才台の壮年になっている。その大人になった子供たちが、今の団地を見てどれほど懐かしさを感じるだろうか。懐かしさから一歩進んで故郷を感じるのだろうか。筆者は現在のつくば市学園地区に故郷を感じることはできない。子供時分(1978~1985)の後、大学院(1988~1996)、そして就職して第二の勤務地として(2001~2011)、つくば市学園地区に居住した。そこかしこに見える筑波研究学園都市の名残のようなものに愛惜を感じる事が多々あった。しかし、もはや故郷ではなく、異郷である。同級生たちも同様なのだろう、筆者が学園地区に10年以上生活している間、訪れてくる友人は無かった。彼等もまた、大学進学や就職により筑波研究学園都市から他出した。研究職公務員だった親も退職等により学園都市を離れた。家だった宿舎も引き払われた。我々は開発の渦中で構成された緑地を「自然」と認知していた。そして、子供として、楽しく遊びほうけていた。しかし、そうした日々は勿論、その場所ですら、もはや手の届かない存在となってしまっている。

一般の団地はどのようなだろう。高齢化が進み、独居老人が増えていると聞く。この子供たちがやはり我々同様、真新しい宿舎(団地)に生活した若夫婦の子供であるならば、「短命な自然」の中にある故郷を失い、異郷化した親の住む団地に戸惑っているのではなかろうか。団地の高齢化の問題は、こうした故郷から異郷へ、という場所そのものの変容にもその遠因を帰することが出来るのではなかろうか。

民俗学は「ふるさと」に関し批判的な言説ばかりを繰り返しているように見える。しかし、「ふるさと」に対する需要は、マスコミのイメージ戦略や、拝金主義の仕掛け人たちが生み出したものではない。ここであげた「故郷の喪失」という卑近で切実な問題を抱える多くの個人が真摯に求め続けているものなのである。現在の「ふるさと」やその資源化に問題があるのであれば、民俗学は「ふるさと」への需要、即ち「故郷を喪失した」と感じる人々の切実な願いに応えるための、建設的な提言をするべきである。

おわりに 一ふるさとと魂の行方一

本論文は、2010年7月に富山大学で行われた歴史民俗博物館共同研究「自然と技の民俗誌」研究会での口頭報告をもととしている。非常に私的な経験談を多く挿入したため、報告当初より、多々ご指導をいただいた。しかし、一方でまた大変面白いと評価して下さる先生方もあった。

なるべく客観的に書くべきかとも考えたのではあるが、先生方の言に調子よく乗ることにし、世に問うこととした。実は、多くの主観を織り込んで私的なことばかりを記したのには訳もある。ひとつは筑波研究学園都市の概成期を語り残そうとするならば、おそらく私がまず口火を切るべきであろう、と思ったことがある。今ひとつは、並み居る諸先輩方を差し置いて、誠に失礼なことなのであるが、筆者には大変に心配なことが出来てしまった。それは、私が何かを伝承する側(年寄り)

になったとき、何が語れるのだろうか？ということである。日頃、私は大学の教員として、果たして存在するかどうかともわからない客観に重きを置いて、その実、権威的な既存理論を振り回して、学生に接しているに過ぎない。そんな自分自身は、本当にこのより若い人々に対し、何か伝えたいことを、きちんと伝えることができるのだろうか。そうしたある意味卑近で切実な悩みの一つの現れが本稿である。

筆者は現在つくば市に住まない。5年程前に転職のため熊本市へ転居した。転居して1ヶ月後、つくば市近くに住む母が亡くなった。とても急なことだった。葬儀が済んでも、どこか納得できなかったのだろう。死後、母親が幾度か夢に登場した。最初は詰^なじられているように感じた。しかし、幾度目かの登場で、母は私の名を呼び、「もういいよ」と言ってくれた。生前の優しい声のままだった。

柳田國男は、『先祖の話』の中で、死後の魂が、村の周囲の秀でた山に帰ると記している。これは故郷の山ということだろう。私たちの魂はどこに帰るのだろうか。母も故郷を離れて長い。

「もういいよ」と言ってくれた夢の後、母はもう一度夢に現れた。人気の無い駅前の通りで、母は日傘をさして私の方を見つめ、笑顔で手を振り続けていた。私はゆっくりと走る電車の中であって、小さくなっていく母の姿を求め続けた。その駅は総武線の稲毛駅であった。私たち家族が筑波の前に10年ほど生活していた街である。母は、何故に最も長く生活した筑波ではなく、稲毛の街に帰ったのだろう。おそらく私の意識がそうさせているのだろうが、どう考えてもその理由が導き出せない。しかし、時間的にも場所的にも遠く離れてしまった稲毛に、言いようのない懐かしさを覚えることは確かである。それは筑波のように、直接その変化を目にしていなかったからなのだろう。

だが、追憶の母が稲毛あるという、その夢によって、私は母の死と和解できた。

その夢以降、母は夢に現れない。

註

- (1)——宮本常一企画監修のドキュメンタリー番組『日本の詩情』（1965～66）の冒頭テロップより。
- (2)——ここでは「真正の自然」を、人の手が全く入っていない入っていない原生林等の自然を指す。日本国内にはこうした「真正の自然」はごく少ないだろう。
- (3)——つくば市ホームページ「筑波研究学園都市とは」より。
- (4)——同上「統計つくば」より。
- (5)——[つくば書店レポート部 2005] 参照。
- (6)——松戸市立博物館の展示と、当館学芸員の青木俊也氏に多くの業績がある。
- (7)——[山本ら 1992]
- (8)——[安井 1997] [岩本 2007] 等。
- (9)——花室住宅は現在の竹園三丁目住宅にあたる。取り壊しが計画されている。
- (10)——[菊池 1989]
- (11)——[阿留多伎 1991]
- (12)——同上 p305
- (13)——同上
- (14)——[筑波研究学園都市の生活を記録する会編（以下、「記録する会」と記述する） 1981・1985]
- (15)——島美佐子「あとがき」より [記録する会 1981] pp.326-327
- (16)——[堀口 1980]
- (17)——島美佐子「並木中学開校の混乱」[記録する会 1985] pp.193-202 を参考とした。
- (18)——[富江 1980] も参照。
- (19)——[記録する会 1981・1985] 参照。
- (20)——「統計つくば」より。
- (21)——新治郡とは、1980年次点で八郷町・千代田町・新治村・玉里村・桜村・出島村で構成されていた郡である。1987年に桜村が筑波郡谷田部町・大穂町・豊里町

と合併してつくば市が成立まで、中学校対抗のスポーツ大会に郡大会というものがあつた、学園都市の中学校もこれに参加していた。

(22)——藤沢勘兵衛「物申す奥様方」〔記録する会 1981〕 p23

(23)——山田幾夫「『租界』でなく『開発』を」〔記録する会 1981〕 p46

(24)——同上 p49

(25)——前注 (22) p24

(26)——前注 (23) p50

(27)——同上 p62

(28)——同上 p54 p62

(29)——同上 p65

(30)——小田倉まさ「花室の山の先住民」〔記録する会 1981〕 p113

(31)——奥井登美子「神話とふきのとう」〔記録する会 1981〕 p16 より。柴原氏はまた一から土作りに取り組み、今でもつくば市内で「しばはら愛善農園」という有機農業を行う農園を営んでいる。

(32)——神酒得三郎「お許しくださいご先祖様」〔記録する会 1985〕 p4

(33)——市村芳男撰「句集『ふもと』より」〔記録する会 1985〕 p268

(34)——まつりつくば実行委員会「まつりつくば 2009 夏のつくばへ Go!」(「まつりつくば 2009」パンフレット) より。

(35)——子供会やスポーツ少年団が小さな金魚ねぶたの綱を引かせて貰っている記憶があるが、そのねぶたは事前に主催者側で準備されたものであった。地元お囃子グループに参画している住民も、もしかしたらいるかもしれないが筆者もこの吾妻地区に生活していたが、聞いたことがないし、誘われたこともない。

(36)——当初はあくまで筑波研究学園都市計画相当部分(2700ha)を指して、筑波研究学園都市と呼称してきたように思う。いつからつくば市全域という講義の定義に

なったのか。筆者は知らない。

(37)——茨城県企画部 つくば・ひたちなか整備局つくば地域振興課ホームページ「つくばスタイル」より。

(38)——同上。また現在、つくば市内の公立中学校において、「つくばスタイル科」という教育過程が新設されつつあるという。中高一貫の新設校でのことであるが、公教育において「つくばスタイル」を教え込むつもりらしい。

(39)——〔牧島 1979〕

(40)——藤原英司「夢と現実—アパート群に囲まれて—」〔記録する会 1985〕 pp.39-40

(41)——〔沼達ら 1985〕 pp.39-40。

(42)——前注 (33) pp.267-268

(43)——〔田島ら 1982〕

(44)——高橋英「老人は語る」〔記録する会 1985〕 p266

(45)——同上。

(46)——「2ちゃんねる」というネット上の掲示板に「茨城つくば市から公務員住宅をなくせ」と題するスレッドがあるという。確かに宿舍も老朽化に伴い改築の要があるが、近年では取り壊されて後、民間マンションばかりが建築される。現 UR 公団にとっても筑波研究学園都市内の吊り上がった地価は、よいビジネスチャンスなのだろう。

(47)——〔倉石 1973〕

(48)——実際には並木地区の新住民に、釣りが非常に上手な背の低い小父さんがおり、その方が花室川で沢山の魚を釣り上げては放流していた。我々は影ながらその小父さんを尊敬していた。一斉防除の日は地元の生徒の通学に支障を来すため、学校は休みとなった。我々はまた野放しだったわけである。

(49)——松戸市立博物館常設展示「常盤平団地の誕生」〔青木 2000〕〔青木 2001〕を参照。

(50)——青木陽二「筑波研究学園都市景観変化の記録」独立行政法人国立環境研究所社会環境システム研究領域ホームページより。

引用文献

青木俊也 2000 「戦後生活資料へのアプローチ」『民具研究』(日本民具学会) 122 pp.38-40

青木俊也 2001 『団地 2DK の暮らし』河出書房新社

阿留多伎眞人 1991 「筑波研究学園都市の都市情報の組織化について—「つくば研究学園都市大事典」を例として—」

『日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)』(日本建築学会) 1991-9 pp.305-306

糸賀黎・矢澤谷子 1984 「筑波研究学園都市上境を事例にした、農村の伝統的環境維持システムの再評価に関する研究」

『造園雑誌』(日本造園学会) 47-5 pp.231-236

岩本通弥 2007 『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館

-
- 菊池健 1989「筑波研究学園都市計画をふりかえって」『日本物理学会誌』（日本物理学会）44-1 pp.2-4
倉石忠彦「団地アパートの民俗」『信濃』（信濃史学会）25-8
田島学・秋山千秋 1982「筑波研究学園都市居住者の緑地機能評価に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）』（日本建築学会）昭和57年10月号 pp.1761-1762
筑波研究学園都市の生活を記録する会編 1981『長靴と星空』筑波書林
筑波研究学園都市の生活を記録する会編 1985『続・長靴と星空』筑波書林
つくば書店レポート部 2005「消え行く官舎」『つくばレポート』（つくば書店）1 pp.4-5
土肥博至・田中一成・坂本淳二・福本佳代 1997「筑波研究学園都市の都市形成プロセスの記述と考察」『日本建築学会計画系論文集』（日本建築学会）498 pp.147-152
富江伸治 1980「新住民の生活行動と意識」建築雑誌（日本建築学会）95-1165 pp.51-55
沼達賢一・太田清澄 1985「筑波研究学園都市のみどりの系の構築」『造園雑誌』（日本造園学会）49-1 pp.37-43
堀口純子 1980「筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）5 pp.71-101
堀口純子 1982「筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント(2)」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）7 pp.127-145
牧島悠美子 1979「筑波研究学園都市に暮して」『お茶の水地理』（お茶の水女子大学地理学教室）20 pp.66-67
安井真奈美 1997「「ふるさと」研究の分析視覚」『日本民俗学』（日本民俗学会）209 pp.66-88
山本正三・高橋伸夫・中川正・橋本雄一・芳賀博文・鹿嶋洋・側島康子 1992「筑波研究学園都市の土地利用」『地域調査報告』（筑波大学大学院生命環境科学研究科）14 pp.1-8

引用したホームページ

-
- 青木陽二・独立行政法人国立環境研究所社会環境システム研究領域「筑波研究学園都市景観変化の記録」(<http://www.nies.go.jp/social/keikan/index.html>) 2010年7月・2012年10月に閲覧
つくば市ホームページ (<http://www.city.tsukuba.ibaraki.jp/>)
「筑波研究学園都市とは」(<http://www.city.tsukuba.ibaraki.jp/13/758/2338/002337.html>) 2010年7月・2012年10月に閲覧
「統計つくば」(<https://www.city.tsukuba.ibaraki.jp/13/885/2106/index.html>) 2010年7月に閲覧
茨城県企画部 つくば・ひたちなか整備局つくば地域振興課「つくばスタイル」http://www.tsukubaexpress-ibaraki.jp/?page_id=14 2010年7月・2012年10月に閲覧

(熊本大学大学院社会文化科学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2013年3月25日受付, 2013年7月30日審査終了)

Essay on the Folkways of Tsukuba Science City : A Folklore Study of Man-made Nature

YAMASHITA Yusaku

Tsukuba Science City is a planned city whose outline was established in 1980. A total of 43 national laboratories, research organizations, and education institutes moved there with their workers and families. It was and still is the largest planned city. In recent years, it has been transformed into a sophisticated suburban town through private urban development projects inspired by the opening of Tsukuba Express line. This report investigates the nature and life of Tsukuba, focusing on its formative years, when it was a typical planned city. The “nature” of Tsukuba Science City was artificial green spaces. It was different from the secondary nature of the neighboring rural areas. The newly afforested “nature” was not used for production activities nor had any relationship with humans. Nevertheless, residents of the science city utilized this “nature” and grew a deep attachment to it. Especially, this trend was obvious in immigrant children. Although these immigrants were called altogether as “new residents,” there were differences among them. They were categorized into different character types according to the time of immigration. All of their children, however, equally put energy into developing fondness for Tsukuba as though it was their hometown while coming to terms with their new environment and classmates. Original residents who had lived in the rural areas around the city were also getting to know new residents who looked solemn as well as man-made nature though they sometimes found themselves in conflict with new residents and the city itself. Those from the neighboring areas have been engaged in Festival Tsukuba held in the center of the Science City. On the other hand, new residents are hardly seen these days. They are becoming involved in the intellectual environment under the slogan of “Tsukuba style.” Now that 30 years have passed since the establishment of the science city, artificial green spaces have widely extended. They have become different from the “nature of the hometown” where children used to play. A “hometown” created by developers is disappearing. The same might go for many children who grow up at large-scale housing complexes. It is not a problem unique to Tsukuba Science City.

Keywords: Tsukuba Science City, urban planning, development, nature, hometowns